

愛でる身体と作る身体：柳川の伝統手芸活動における技術的実践

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学府教育学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7385176>

出版情報：国際教育文化研究. 14, pp.1-13, 2014-08-28. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



愛でる身体と作る身体

－ 柳川の伝統手芸活動における技術的实践 －

坂元 一光

はじめに

小論で取り上げるのは福岡県柳川地域の「さげもん」と呼ばれる伝統手工芸の制作活動である。それは地域に根付いた伝統のモノづくり活動であり、そこでは制作物のモノ（つるし飾り）と女性たちの身体化された民俗技術がとりわけ重要な位置を占めている。小論は柳川の女性たちの伝統のモノづくりをめぐる生活世界を身体と技術という2つの角度から捉えなおし、当地のさげもん習俗の新たな民族誌的断面を見出そうとする試みである。

具体的には、さげもん作りの技術を年間を通じた連続的な諸活動の中に位置づけることで、習俗の総体としての社会的実践にまたがって埋め込まれ、全体の文脈と切り離しては存在しえないあるいは駆動しえない技術の在り方を女性の2つの技術的身体を取り上げながら確認する。柳川では地域の伝統手工芸の再評価や手芸の趣味活動化の流れの中で地域内に多様な手芸実践のコミュニティが形成されており、女性たちはそこへの能動的参加によって自らの技術的身体と生を積極的に再構築している。かつて女性の身体を抑圧的、教化的に構築してきたとされる手芸は、現代のさげもん作りの実践のなかで再文脈化され女性の生の再構築だけでなく地域の活性にも積極的にはたらく民俗技術となっている。

1. 技術論としてのさげもん作り

1980年代後半から人類学者たちの世界に吹き荒れた民族誌的他者表象をめぐる批判と内省は、その後の人類学研究の在り方を模索する活発な議論を生み出した。一方で以後の研究が民族誌テキストそれ自体の解釈や批判に終始するあまり、日々現場で営まれる人々の生のあり様に向き合いその経験をていねいに語りなおすという人類学研究の基点が忘却されていることに対する懸念も指摘されるようになった。日常世界への再帰とよばれるこの動向は、現地の人々の日常世界の「非言語的」側面や営みに対する研究として活発化しはじめ、たとえば田辺繁治の身体を軸に展開する日常的実践（慣習的行動）に焦点化する一連の仕事などはその代表的なものである（田辺 2003、2010 等）。またこの動向が身体を含むモノとヒトとの関係性から紡ぎだされる生活の非言語領域を志向するという共通の関心の在り方は、フランス技術研究の伝統を継承しつつ身体を発現元とし社会システムとして稼働するという視点からの技術の社会的実践論（大西 2014）や機械技術に着目しモノと人との生成的な関係解明を試みる研究（森田 2012）、あるいはモノのエージェンシー性に注目した生活世界の解明（アクターネットワーク論）の研究としても展開している。小論もそうした新たな研究動向にそったひとつの試行的作業として位置付けられる。

ここでの技術論の基点となるのはいうまでもなくモースの身体技法の概念である。モースは技術の由来を

人間の身体にまでさかのぼりその社会的規定性と歴史性を指摘することによって以後の人類学的技術研究の礎を築いた。小論で取り上げている女子教育を通じて身体化され、また新しい社会的文脈のなかで再構築される手芸技術についての議論はこの身体技法概念を出発点としている。さらに森田によるとモースは技術的行為の集積あるいは「行為の連鎖」として「産業 (industry)」や「クラフト (craft)」を捉える独自の視点を持っており、そこには道具の製造プロセスやから道具を用いて活動をおこなう身体技法までが含まれるという (森田 2009 : 22, Mauss2006:112-3)。そしてモースの「行為の連鎖」のアイデアは彼の研究伝統を受け継ぐルロア・グーランによって発展させられている。彼は主著『言葉と身体』において先史人類の言語活動と技術 (道具) との密接な関係を論じるなかで技術を「一連の動作に安定と柔軟さとを同時に与える文字通りの統辞法によって、連鎖的に組織された身ぶりと道具」 (ルロア・グーラン 1973 : 122-3) と定義し、技術的实践を成り立たせている身体的基盤として「動作の連鎖」に着目する「シェーン・オペラトワール」論を提唱した (注 1)。大西はシェーン・オペラトワール論の重要性を指摘して「技術的实践を、さまざまな環境的・社会的な制約と関係性の下、不可逆的な時系列のなかで展開・配列される一連の動作として理解することにある」 (大西 2014 : 44) とし、その視座が「技術的实践を構成する、断片的で一過性に過ぎない身体活動を、社会制度として読み解くためのコード」 (同 : 45) となりうる可能性を述べている (注 2)。

柳川のさげもん作り (の技術) も単なる制作工程やそれに関する知識にとどまるものではなく、行事の展示や接待を通じそれを「愛でる」習俗、贈答のしきたり、販売や流通、創作や手芸の実践コミュニティの営みなど相互に密接に関連する行為や活動から成り立っている。すなわちさげもん作りを構成する一連の身体活動としての技術は、ひな祭り習俗をめぐる年間の諸活動や人と人との関係構造、さらには女性を中心とする集合的な快美感覚 (ジェンダー化された共属感覚) 等のなかに埋め込まれたものとして存在している。そうした技術的实践はいわゆる一連の身体活動が配列されたシステムとして捉えられ、モースの技術的「行為の連鎖」やルロア・グーランによる技術の「シェーン・オペラトワール」論の動作の統辞法などの延長上に重ねて描くことができると考える。

2. 民俗技術としてのさげもん作り

1) 初節句におけるさげもん

福岡県柳川市域のひな祭り行事は通常のひな人形とともに華麗な刺繍をほどこされた鞠と数多くの手芸小物から構成される華やかな吊るし飾り「さげもん」によって特徴づけられている。初節句を迎えた家庭では、このさげもんがひな人形の壇飾りの左右にすだれ状に吊り下げられ、祝いの空間にさらに彩りを添える。紅白の竹の輪に吊り下げられた鞠、動植物や人形の手芸品には、子どもの無事成長と幸せを祈る親たちの期待がシンボリック表現されている。さげもんは初節句を迎えた女兒の母親や祖母、近隣・親戚の女性たちが手作りで準備する初節句祝いの飾りや贈答品としてひきつがれてきた。柳川の「さげもん」は、当地の初節句行事に華やかな彩りと地域的独自性を与えている (白石 2006)。

ちなみに柳川的女兒の初節句習俗自体は、さげもん飾りを除けば全国的に見られるものとほとんど変わりはない。柳川全域を対象に一年の行事を地域ごとにまとめた郷土民俗資料『柳川の民俗概観』 (柳川市史編纂委員会2004) によれば地域を超えほぼ共通する初節句の様子が見出される。柳川的女兒初節句は新暦の3月3日におこなわれる。嫁の里方から雛人形とさげもんが贈られる。雛人形のほかにこの地方では「ごんたさん」と呼ばれる市松人形もよく贈られる。ごんたさんには宮参りに使った着物が着せられる。そのほか這人形や嫁入り道具を模した一組の小さな布団、丹前なども飾られる場合も多い。普通、節句の一ヶ月前から飾り始め、節句の日には親戚をよんで祝いの膳をもうける。赤飯や菱餅をつくって近所にふるまうこともあった。またこの日は知らない家にも上がって雛人形を観ることができ、とくに子どもたちは家々をまわってお

菓子などの土産をもらっていた。こうした祝いは原則として長女のときだけである。

2) 産育祈願の民具

初節句の祝い品のさげもんには女兒の産育をめぐるさまざまな観念や期待が込められている。個々の細工物の解釈には諸説あるが、基本的には子ども（女兒）に期待される資質や特徴および幸福にむすびつくシンボルから構成されている。さげもん輪に吊り下げられた 49 種の動植物や人形の手芸品には、それぞれ子どもや女兒への願いや期待がシンボリックに表象されている。たとえば女兒に向けられた形象としては、鼠：子沢山、金魚、蝶：艶やかさ、鶏：早起き、蟬：忍耐、蛤：二夫にまみえず、唐辛子：虫よけ、などあげられる。また子ども一般の成長や幸福をねがう形象としては、猿：災厄除、ひよこ：あどけなさ、うさぎ：快活、鶴、海老：長寿、瓢箪：無病息災、這い人形：成長などがある。

ちなみにさげもんと歴史的に関連の深い「ちりめん細工」にも子どもの招福や魔除け、御守りや迷子札などや産育にかかわる品々が数多く見出せる点において、いずれも子どもの産育に直接かかわる女性によって作られる細工物であり、さげもんとちりめん細工には母子関係にもとづいた子どもへの期待や願いが共通に表現されていると考えられる。

3) さげもんの構成

さげもんの一般的な形態は、竹で作った輪の下に等間隔に三本の糸を下げ、それぞれの糸に 7 種の手芸細工を下げる。中央には大きな「御殿（柳川）まり」を二つ下げる。最終的に鞆と袋物からなる合計で 51 個の飾りから構成される。これを 2 さげ 1 対（つい）用意して、お祝いとして贈る。細工物の種類とか個数あるいは吊るす順番などは、今でこそ明確に説明されるが、けっして古くからの決まり事というものではない。さげもん「伝統」の継承に取り組む「柳川まり保存会」（後述）の創設（昭和 35 年）や観光化された「柳川さげもんめぐり」が定着するなかで、外部のまなざしを意識した説明が整えられていった。

（図 1）さげもんの基本構成（中央の鞆二個を除く）

	1	2	3	4	5	6	7
1	みかん	まり	ひょうたん	まり	いちご	まり	貝人形
2	まり	おかめ	まり	さる	まり	つる	まり
3	赤ちゃん人形 (女)	まり	せみ	まり	ききょう	まり	ちょうちょ
4	まり	桃	まり	カナリア	まり	赤ちゃん人形(男)	まり
5	にわとり	まり	うさぎ	まり	ひよこ	まり	宝袋
6	まり	三番叟	まり	ねずみ	まり	金魚	まり
7	這い人形(男)	まり	這い人形(女)	まり	這い人形(男)	まり	這い人形(女)

<「柳川伝承まり・さげもん研究会」資料>

4) 技術的系譜と伝統の創造

さげもん作りの技術は初節句行事に組み込まれるかたちで継承されてきた。現在のさげもんの習俗は初節句行事の観光資源化やさげもん作りの趣味活動化などさまざまな社会的影響を受けながら今日見られるよう

な華やかな習俗になった(注)。しかしながら華麗な鞠や細工物をともなった現在のさげもんの形になるまでには、複数の手工芸技術の接合や融合の過程を踏んできたと考えられる。それらの流れを大別すると1) 庶民層に受け継がれてきた祝いや祈願の素朴な吊るしの習俗、2) 奥女中のたしなみから城下の人々に広まっていった御殿まり作り、3) 江戸中期から明治・大正期頃、民間の女性たちの間に広まったお細工物作り、さらにこれを全国的に普及させた4) 女子学生のための公教育としての裁縫教育、などに分けて考えることができる(注3)。今日あるさげもん作り及び飾りの習俗はこれらの技術や習俗を融合させて生み出された言うならば「創られた伝統」である(ホブズボーム 1994)(注4)。そしてこの伝統の創造過程には「柳川まり保存会」が重要な役割を果たしていたと考えられる。

北島ミチ氏(大正3年生、故人)は柳川まりの美しさや伝統としての貴重さに魅せられ、昭和35年に仲間たちと「柳川まり保存会」を設立し、自身は初代会長となった(注5)。ちなみに彼女は立花家の奥女中を務めた池松フイ氏(明治20年生、昭和40年没)からまり(御殿まり=柳川まり)の手ほどきを受けている。彼女はまりの他にさげもんのための細工物も作っており、現在にいたる柳川のさげもん作りの基準が「制度化」されたのは、北島ミチを中心とした「柳川まり保存会」の創設時(昭和35年)の頃であると言われる。そしてこの基準の「制度化」によって今にいたる華やかなさげもん細工の「伝統」が作られた。

そしてこの創造された「伝統」に対しては、当時の会員によって各人の個性や美意識にそった解釈がなされ、現在のさげもん作りの多様な作風や制作技術の展開につながっていくことになる。

5) さげもんの制作工程

(以下、緒方(2006)のテキストより。図は省略した。)

① 細工物(いちご)作り

ここでは最も単純と思われる「いちご」を例に細工物作りの概要を示す。

材料は赤字に白色水玉の布2枚、和紙2枚、緑色フェルト1枚、木綿糸(赤、緑)、道具は針、待ち針、断ちはさみ、のり、手芸用ボンド、型紙等を用いる。

制作手順は次のように進められる。型紙を厚紙で作る。赤線より0.5cm大きく和紙を切る。和紙のふち全体にノリを少しつけ、実の布の裏側に貼る。和紙と同寸に布を断ち、中表にして、赤線の0.5cm内側を縫う。赤線に沿ってのりづけした部分を切り落として、表に返す。口をぐし縫いして、おいしそうにみえるように綿をたくさん入れた後、縫い縮める。フェルトにヘタの型紙どおりの印をつけ、断つ。星形の中央に切り込みを入れ、長方形のフェルトを2つに負って切込みの中に入れ、手芸用ボンドで固定する。実にヘタを星止めでとめつける。以上、30分もあれば仕上げられる比較的簡単な作品の例である。

② 御殿まり作り

材料は木毛(パッキン)、手芸用綿、しつけ糸、リリヤーン糸、ラメ糸、道具は、はさみ、ふとん針、糸通し、待ち針、メジャー等を用いる。

御殿まりは柳川の伝統手工芸であり当地の吊るし飾りを特徴づけている構成要素である。まりを美しく彩る刺繍の模様は多種にわたり、二つ花、六つ花、麻の葉、かがり花、のし等を基本的な図案としその基本図案ごとに多様なアレンジやデザインが派生する。以下に制作過程の概要を示す。

まりの土台(玉)は木毛(パッキン)を芯にして球状に成型する。より手軽な方法として発泡スチロール製の玉を用いることも多い。前者の場合、木毛を芯にしてその周囲を手芸用のわたで包み、さらにその上から木綿の仕付け糸を巻いて球状に成型して土台とする。次に出来上がった土台の丸い表面上にラメ糸を用い「地割」(均等な区割り)を附す。まず待ち針を打ちながらラメ糸で均等に上下半球に分けたうえで(赤道と呼ぶ)、さらに上下の極(北極、南極と呼ぶ)を軸に縦方向に均等に分割し(4、6、8等分)基本分割をつ

くる。その上からデザインに合わせて適宜新たな極を定めさらに分割し、刺繍で埋めていく区割りが準備される。刺繍の過程はテキストなどに詳しいので省略する。

材料やデザインに関しては人それぞれ、あるいは制作グループごとにこだわりがあったりもするが基本的な制作手順はほぼ共通である。また技能に関して熟練者や指導者と一般・初心者の違いは、裁縫や刺繍の技術の精度とスピード、あるいはデザインの巧みさ、美しさにおいて評価される。精度やデザイン卓越性に関しては「手がきれい」と評され、スピードの速さは「手のはやい」などの言葉が用いられる。

さげもんは御殿まりと細工物をつないでようやく完成する。出来上がったさげもんのサイズは高さ1メートル以上の大ぶりなものから30センチほどの棚かざり用のものまでさまざまである。

3. 観光資源化と二つの時間の生成

近年、ひな祭り習俗の観光事業化やさげもん作りの趣味活動化によりさげもんそれ自体への関心と需要が高まり、それに伴って地元女性を中心に趣味と実益を兼ねたさげもん作りが盛んにおこなわれるようになった。地域の固有の行事や民俗を観光の資源として活用しようとする試みは、今や全国的に見られる現象であるが、柳川市でも生活習俗の一環としてあった女兒の初節句祝いと雛人形飾りが広く地域や観光客を巻き込んだ地域イベント的性格を持つようになった(注6)。そこには観光のまなざしのなかで生活習俗としてのひな祭りが地域の新しい「観光ひな祭り」として再構築される過程が見いだされる。商店街まで巻き込んだ2ヶ月間の観光事業は柳川の初節句行事に家庭領域を超えた地域的広がりや祝祭的雰囲気を与え、また季節限定の祝い品であったさげもん飾りも一年を通して観光客の目を楽しませる伝統手工芸品になり、その需要の高まりは結果として地元のさげもん制作を活発化させた。それまでさげもんは初節句家庭への祝い品として母親や祖母、親戚女性等によって手作りされてきたが、土産品や既製品としての新たな市場を生み出すことにもつながった。

このように柳川の観光ひな祭り「柳川さげもんめぐり」は地元習俗を再構築したものである。それは柳川市内に招き入れた観光客が、市中のさまざまな場所に配置されたさげもんや雛飾りを「愛でる」ことを目的にしている。もともと家庭習俗としてあった初節句やひな祭りもこの期間だけは家人以外の客や子どもを招き入れ飾りの前で簡単な接待をしており、柳川さげもんめぐりはそうした歓待習俗を観光の文脈において流用したものである。柳川さげもんめぐりでは期間中の華やいだ雰囲気を持続的に生み出すために、市内の観光拠点や商店街の吊るし飾り展示のみならず、祭りの期間中(2月3日から4月4日まで)さまざまな小行事(サブイベント)を催し、その伝統的演出によって観光客を楽しませている。一連の小行事のほとんどは新しく戦略的に創出されたものであり、2か月近くにおよぶイベント期間の賑わいを維持するアクセント(節目)の役割を担っている。各小行事は全体に一貫性を意識して構成、配置され柳川独自のひな祭り行事を再創造する取り組みとなっている(注7)。

さてこの柳川さげもんめぐりの愛でる期間が終了すると、さげもん飾りは初春の街の主役から背景へとすりぞく。イベントの終了後、地域の女性たちはふたたび翌年に向けたさげもん作りに取りかかるのだ。柳川の一年を吊るし飾り(さげもん)の習俗やイベントに焦点化して見ていったとき、それは大きく1)初春の祝い行事として初節句家庭でのさげもんの展示と鑑賞、地域を代表する制作集団である婦人会やシルバー人材センターの展示即売会での集約的な展示・販売・鑑賞、また観光ひな祭りのために地域、商店街をあけて展示し鑑賞する、いわば「愛でる」期間と、2)初節句の贈答や趣味活動のため地域の女性たちが仲間同士集まり(あるいは自宅で個人的に)、鞠や細工物を制作する時期、いわば「作る」期間とに分けられる。民俗学的な時間範疇でいえばそれはハレの期間とケの期間に相当している。

地元のひな祭り習俗の観光資源化は祝祭的な時空間を地域全体に現出させることで、さげもん制作にかか

わる地元女性たちの年間の生活時間に大きな節目をもたらすことになった。別言すればさげもんを「愛でる」期間と「作る」期間、そして再び「愛でる」期間へと毎年繰り返される時間の循環である。それは初節句に関わる家庭の女性の生活にも見られるものであったが、習俗の観光化によって地域ぐるみの華やかな祝祭イベントとしてより公共的な輪郭を与えられることとなった。またさげもんの土産品化や既製品化（祝い品のさげもんを手作りするのではなく既製品として購入する）による需要が増すことで、作り手層が広がりその制作活動も年間を通じた集合的活動としての性格を持つようになった。

そしてこの二つの時間を結びまた転換させる役割を果たしているのが「さげもん即売会」である（注8）。地域で作られた鞆や細工物が一堂に会して展示販売される「さげもん即売会」は、「作る」期間から「愛でる」期間への転換をうながす機会として、また地域で作られたさげもんの全体的流通が集約的に顕在化する機会として重要な役割を担っている。

以上のようにさげもんひな祭りをめぐっては街をあげて飾り立てる期間とそれ以外の準備期間すなわちさげもんを制作する期間に分けて理解できる。すなわち柳川のさげもん作りをめぐってはこれを「愛でる」期間と「作る」期間という対照的な社会的実践の循環として捉えることができるのである。そしてこの循環はそれに連動する技術的行為を伴っており、それぞれ女性の身体を基軸に構築されている。ここではそのような女性の技術的身体の在り様をそれぞれ「愛でる身体」と「作る身体」と呼ぶことにしたい。

4. 技術的身体の生成

1) 「愛でる身体」の構築

柳川のさげもん作りは手指を用いる女性の技術的实践としてあるばかりでなくその周辺にもうひとつの身体的技術の領域すなわち「愛でる技法」としての感覚的領域をとまなっている（注9）。さげもんの制作のみならずその観賞（愛でる行為）も、女性を中心とする趣味や楽しみの行為であり男性をゆるやかに排除した領域を形成している。もちろん男性でもその美しさや華やかさ、細工の見事さを愛でることは可能であるが、実態としてさげもん作りの技術的实践やモノとしてのちりめん細工自体が提供する快美感覚の主たる享受者はあくまでも女性が中心となる。今日のさげもん作りは地元女性の趣味の手芸として広く普及しており、季節や歳時をとらえた風情、飾り小物としての愛らしさ、ちりめん布の華やかな色彩と繊細な質感が女性たちを惹きつけそれに関わる様々な活動（展示や鑑賞）への参加を促している。

一般に手芸の喜びは単に制作工程のみで完結するものではなく成果物（モノ）としての作品を他者に向けて展示し、また共に美しさや巧みさを鑑賞する行為も含んだものとしてある。さげもん作りの場合もその制作工程だけではなく季節を彩る飾り小物としての展示、鑑賞過程まで含めて初めて総体的プロセス（制度としての）技術が完成する。こうしたさげもんの美しさを鑑賞し受容する能力すなわち「快美感覚」は、それに関わる女性の身体に刻み込まれたひとつの技法のかたちをとっていると考えられる。ここではそうした技法が組み込まれた身体を「愛でる身体」と呼んでおきたい。さげもんのような特定の作品対象からの快美性を受容できる身体感覚は、後述するようにそれが生権力による抑圧の結果であるか否かは別として、ある程度女性に限定されて構築された身体技法といえるものである。

生活世界を生きる人間の感覚が社会的、歴史的にあるいは慣習によって構築されるということに関しては、哲学の中村雄二郎（1997（1975））や桑子敏雄（2001）、人類学からはM・モース（1976）、社会学からはP・ブルデュー（1998（1990））やA・シノット（1997）らがそれぞれの著作のなかで論じている（坂元2010）。感覚の在り方を集団的あるいは性別などの社会的カテゴリーごとの差異を前提に、人びとが生活を営むためのひとつの技術と捉えるならば、それは身体の微細なレベルにおけるふるまいの型であることには違いなく、それはまたモースの身体技法に連なっている。このことは、たとえばモースの「この身体技法についての概

念から、ただちに二つの事柄が浮かび上がってきた。それは、身体技法は性別、年齢別に区分され、変化するということである。」(モース 1976 : 135) という指摘やシノットの「身体と五感は、多様な人間集団による多様なやり方で、社会的に構築されるものであり、それは身体の様々な器官や過程や特性についても同様である。」(シノット 1997 : 12) という言葉を参照するまでもないだろう。

さげもんの展示と鑑賞をめぐる快美感覚は、手指の動きや縮緬の手触り、素材の細部への眼差し等その制作活動を通して身体深く刻み込まれた感覚との関係において生み出されている。さげもん作りを楽しみまたそれを愛でる柳川の女性の生活様式や生活感覚は、女性の技術である手芸が、訓練や製作のプロセスをへて手指を用いる技術や知識として身体化されると同時に同じ身体にもとづく独自の感覚的技法もつくりだしていることが理解されるのである。

2) 「作る身体」の歴史的構築

さげもん作りの基本的技術は明治初期からの女子教育を通じて女性の身体に構築されたひとつの技法であった。明治期の女性の手芸教育に関しては、山崎明子がジェンダー論の視点から歴史的検討をくわえている(山崎 2005)。彼女は当時の「手芸」は近代日本の家父長制と資本性、さらには近代家族・家庭・家事労働などの問題群の中から生み出された女性役割として位置づけられていく過程を明らかにした。彼女は明治期の「手芸」は近代日本の階級イデオロギーとジェンダー・イデオロギー、さらには儒教的思想などを背景に巧妙に概念構築され、国家の枠組みに適合する女性役割を女性自らがすすんで選び取ることを促すいわば女性の国民化のシステムとして機能したことを指摘する。興味深いのはそこに技術を社会制度や社会システムとして捉えようとする新しい技術論へと接続していく視点が見出されることである。「手芸」は、こうしてすべての階層の女性が、あたかも「自らの意志で行なう」かのように、教育や宣伝によって刷り込まれ、女性性と女性美徳の不可欠の条件として強制され(山崎 2005 : 290) た技術となったのだ。こうして「手芸」と「女性」との分かち難い結びつきは教育的回路を介して制度化され規範化されていったのである。

女性の身体技法として社会的、歴史的に構築される手芸技術の様子は柳川でも同じように見られる。柳川の女性たちの技術的身体を構築する過程においてとりわけ重要な役割を果たしたのが杉森シカを創始とする実践的手芸教育の伝統である。現在の杉森高等学校のもととなった私塾「杉森女紅会」は東京の共立女子職業学校に学んだ杉森シカによって明治 28 年(1895)に開かれた。「女紅」の語は明治期を通じて「手芸」とほぼ同義に用いられ、裁縫、機織、刺繍、編物、細工、押花、押絵などを包括する「女の手わざ」一般をさす概念であり、関西地域を中心にひろく開設された女子中等教育機関の一種であった(山崎 105, 239)。その後、柳川の「女紅会」は「私立学校令」(明治 32 年発布)にもとづいて正式な学校組織に改められ明治 41 年私立「杉森女芸学校」として開校し、その「女の手わざ」を中心とした実践的な裁縫・手芸教育の伝統は現在の杉森学園にまで引き継がれてきた(『杉森百年史』)。柳川の手芸技術の普及には杉森の実践的女子教育が果たした役割を無視することはできない。

杉森女学園でお細工物を学んだ卒業生たちは、少なくとも戦後すぐの時期には、和裁の教材としてさげもんにさげる細工物やまりを作ってこれを文化祭で即売している。また伝統的に通婚圏が地域内に限定される傾向が強かったため、技術を習得した卒業生の女性たちは地元に残ることが多く、結果として地域内への技術の普及、浸透が促されたと考えられる。このことは即売会や制作集団の観察やインタビューにおいて頻繁に卒業生を見出すことから推測される。柳川におけるさげもん作りの技術的身体は明治以来の実践的女子教育のローカルな普及によって構築、継承が促されたのである。

さげもん作りの手芸技術は明治初期からの女子教育を通じて女性の身体に構築された技法であった。もちろん学校教育だけでさげもん作りの技術が形成されたわけではなく、そこに連なる歴史的基盤として江戸期

の都市部の家庭の子女たちや公家社会の実践から生み出された日本の裁縫文化があった。「ちりめん細工」の復興・普及活動に取り組む井上重義によれば、柳川に古くから伝わるさげもんは日本の女性による手芸文化のなかに位置づけられ、歴史的には江戸期の富裕層の女性の間で作られていた「裁縫お細工物」と呼ばれる手芸細工に由来する（井上 2004、2008）。柳川の女性の現在のさげもん作りにおける刺繍や裁縫の手技もそれらの延長上に引き継がれたものである（坂元 2012）。

3) 多様な技術的实践と「作る身体」の再構築

柳川のさげもん作りは母親と娘の親子関係を軸に家庭内領域で受け継がれる民俗的な手芸技術であった。これに対し手芸教育による女性教化の問題に着目する山崎は「近代日本の「手芸」行為が身体的・生身体的な女性の統御である」と述べ、手芸知識におけるジェンダー化された身体技術の側面を指摘している。しかし近代日本において女性たちの間に抑圧的に構築された手芸技術はそのままの性格を伴って今に受け継がれているかといえそうとは言えない。少なくともその後の手芸技術が依存する社会状況や文脈は大きく変容しており、柳川の民俗的な手芸技術に関しても、女性の生に対し抑圧的に働くというよりも、生涯発達や社会参加に与する一つの知識的資源として再文脈化されている（注 10）。

先述したように柳川に古くから伝わるさげもんは日本女性の手芸文化のなかに位置づけられ、歴史的には江戸期の富裕層の女性の間で作られていた「裁縫お細工物」と呼ばれる手芸細工に由来する。明治から大正時代にかけては家庭以外でも女学生の家政教育の教材として用いられた。柳川の手芸技術はさげもんの趣味活動化や観光資源化等の社会的後押しを受けて学校から地域社会へと実践の拠点を移していく。現在、柳川で見られるさげもんお制作集団は、特定の理念や趣向、目的等を共有するゆるやかな趣味の手芸の集まりとして展開している。先述した「柳川まり保存会」には後の柳川の多様なさげもん作りの流れを形成する指導者たちが参加していた。そこから「つり雛工房」（酒井愛子）、「夢工房」（下田美知子）などが派生し、さげもん作りにおける独自のスタイルを開拓していった。これに対し、「柳川まり保存会」（北島 妙）や「柳川伝承まり・さげもん研究会」（緒方文香）は「伝統」との連続性、正統性を守る制作活動を進めている。筆者なりに整理すると、これらの多様なさげもん作りの展開及び流れは、大きく伝統派と革新派（創作派）に分けられる。伝統派はいうまでもなく「柳川まり保存会」や「柳川伝承まり・さげもん研究会」の制作スタイルであり、保存会設立時に確認され、共有された「伝統」の制作スタイルを継承しようとする活動主体である。これに対し、「つり雛工房」や「夢工房」などの革新派（創作派）は、その「伝統」の上に立って作家の個性や時代の嗜好を反映させていこうとする制作スタイルをとっている。柳川ではこうしたグループだけでなく公民館や手芸店の教室などで活動する数多くの制作集団が見られ、女性たちはその嗜好や目的に応じてさげもん作りを楽しんでいる。こうした地域に幅広く準備された技術的实践の場は、女性たちの多様な目的や美意識を受け止め地域全体の作り手のすそ野を拡大する重要な要因となっていると考えられる。

筆者はこれまで柳川の手芸活動について現地の実態にもとづく報告を行ってきた（坂元他 2011、2012）。さげもん作りが行われている公民館、シルバー人材センター、商店街の手芸店などでの観察やインタビューから見えてくるのは、集まって手芸をする女性たちの楽しげで熱心な技術習得やそれを通じた交流の様子である。参加者の女性たちはさまざまな目的や動機をもって参加しているが、基本的に個人的で自由な趣味活動として手芸に取り組んでいる。そうした実践からはもはや手芸技術の他律性や抑圧性をうかがうことはできない。現地で観察され語られるのは手芸活動に対する楽しさや充実感であり、そこには個々人の趣向や目的によって自由に選び取ることのできる趣味的行為としての手芸実践が見られる（坂元 2014：11-12）。

家庭やサークル活動での今日的なさげもん作りはいわゆる「実践としてのコミュニティ」を形成しているといえよう（平井 2012）。それには先に見た柳川における様々な制作集団の技術的实践における場の多様性

の存在が大きく貢献している。女性たちによるコミュニティへの能動的な参加を通してかつて身体化された抑圧的な手芸技術は女性の生の充実や享受を提供する技術として女性たちの身体において再度、構築されている。さらに言えば柳川の手芸活動は単なる個人的趣味の領域に閉ざされた技術的实践ではなく、地域の習俗に埋め込まれ近隣住民との関係性の中で行われる集团的、地域的、民俗的な技術的实践なのである。

おわりに

さげもん作りの技術は単なる裁縫や刺繍の技術ではない。その技術は制作活動それ自体として完結するものではなく、「愛でる / 作る」という習俗全体の活動循環の中に配置されてはじめて成立するいわば関係性の（あるいは社会的）産物である。それは柳川という地域社会や一連の習俗的活動の連鎖に埋め込まれた民俗的技术であり、さげもん本体やそのパーツ（鞠や細工物）の制作から贈答、販売、展示（しつらえる）、鑑賞（皆で愛でる）まで一連の関連活動の相互の関係性において初めて稼働するプロセスあるいはシステムとして存在する技術なのである。そしてそれらを構成する諸活動はどれも状況ごとに組織化された技術的ふるまいとして相互に連なり、最終的に技術の社会的、全体的プロセスを形づくっている。

さげもん作りの技術の様態を一連の身体活動として捉える視点は、愛でる技術的身体と作る技術的身体という二つの女性の身体の在り方を浮かび上がらせることにつながった。行事の観光化やさげもん作りの趣味グループ化は地域をあげてさげもんを愛でる期間と作る期間という循環する二つの時間を生み出し、各々の期間における女性たちの活動が集会的性格を帯びるにつれその活動を生み出す身体的技术も社会的輪郭をとって現われた。我々はそこに女性たちの二つの技術的身体の在り方を見出すとともに各身体が備える構築的側面について確認した。最後にさげもん作りを支える手芸に関して、かつてそれは女性たちの身体に教化的、抑圧的に構築された技術とされてきたが、現在の柳川では女性たちが自ら作り上げた多様な手芸実践のコミュニティへの参加を通して自分たちの生の充足や再定義に用いる技術としてその身体において再構築されている現状を示した。

<注>

注1) こうした技術の考え方は個別に分断され所有されるものではない特定の活動への参加、実践の中で人々の関係やモノと人との間で分かち持たれる（関係的）知識の容態を論ずる視点（暗黙知、身体知）に重なるものがある。

注2) モースやルロア・グーランにつながるフランス技術研究の新しい展開については大西（2014）や後藤（2012）によって詳しい紹介がなされており、なかでも大西はこの技術論の伝統とその新しい展開にポストモダンの民族誌批判を乗り越える可能性を見出そうとしている。彼は Lemonnier（2002）等に依りつつ技術を「単なる道具や設備といったハードだけでも、知識や作業工程といったソフトだけでもなく、それらを含みこんだ総体としてのシステムとして稼働する社会制度」（大西 2014：36）と定義し、またその身体活動としての側面を「特定の社会的・文化的目的を達成するための技能を身につけ、それを実現しうる技法によって物理的な外部環境にはたらきかける、無数の身体が配列されたシステム」（同：37）として捉えることで、あらためて社会的文脈や身体に埋め込まれた技術の様態を指摘している。

注3) ①庶民層に受け継がれてきた祝いや祈願の吊るし習俗に関しては、これまでの調査の中で訪れた柳川市郊外の旧家や一般家庭の初節句飾りの様子やそれに関する昔の話しから得られた習俗の基層の部分に相当する。平成24年、平成25年に初節句を迎える家庭を訪問し吊るし飾りの観察をおこなった。そこには華やかな今風のさげもん飾りがある一方でもっと質素なさげもんも飾られていた。毛糸を結んでつくった小さな人形をたくさん吊るしたもの、ヤクルトの容器を人形に模したものやペットボトルのふたを集めてさげたもの、千羽鶴だけを吊るしたもの、紙細工の傘や花びらをつ

ないだものなど、さまざまな吊るし飾りが見られた。かつては畳などの材料に加工したいぐさの切れ端から作った傘や有明海のアサリを使ったものなどが吊るされていたとも伝えられている。このことから元々の庶民の初節句行事のさげもんは、今のような華やかなものではなく身近の材料を用いたより質素な吊るし飾りであったことが推測される。柳川に残る古いさげもんの中にはさる（括り猿）とまりだけのものもあることから、昔ながらの縁起物や災難よけの祈願物を下げて子どもの健康と無事な成長を祈っていたことが想像されるのである。次に②の奥女中のたしなみから城下の人々に広まっていった御殿まり作りの伝統、に関しては、その伝統技術が習俗をとまなう民俗技術として今に至っていると考えられる。とくに御殿まりをさげもん飾りに組み入れることは、他の地域の類似の吊るし飾りの習俗に見られない柳川の特徴といわれており、そこには御城下の伝統文化と庶民の習俗の融合のすがたを見ることができる。③の日本の細工物文化との連続性および④の手芸教育のローカルな歴史に関しては、とくにさげもんに下がる細工物作りやその技術と密接に関連している。現在につながるさげもんの由来や変化に関する厳密な時代的考証はこれからの課題であるけれども、ことそこに組み込まれた手工芸技術の形成に関しては、以上のような複数の技術的流れが複雑に絡まりあって生み出されたものであることが推測されるのだ。

注 4) 古いお細工物が描かれた文献資料（『用捨箱』柳亭種彦、天保 12 年（1841）、『寺貞漫稿』喜田川守貞、天保 81837 ～幕末）や当時の古作品を参照するならば、柳川のさげもん（とくに手芸小物）の制作や普及は、少なくとも江戸期末以降に形成された可能性が高く、それ以前にさかのぼるとは考えにくいといえる。この時代には商品経済の発展とともに太刀袋や巾着、煙草入れなどの袋物を専門的に製作する「袋物師」が登場し、都市部の家庭の子女たちは公家社会の裁縫文化や職人の手による商品の影響を受けながら自ら細工物作りに励むようになっていたという（井上・尾崎 2009：18）

注 5) 北島ミチを中心に創設された「柳川まり保存会」及びその意志を引き継いだ姪の緒方文香の「柳川伝承まり・さげもん研究会」はさげもん作りの技術や素材等に関して自覚的、意識的に「伝統」の維持と連続性を重視しており、多様な展開を見せる柳川のさげもん作りの現状を俯瞰する際の基点の役割を果たしている制作集団である。「柳川まり保存会」は創設者北島ミチ氏の義理の妹にあたる北島妙氏が二代目会長をつとめている。

注 6) 平成 6 年、柳川地方は大規模な早魃を被り、観光の目玉である川下りが中止に追い込まれた。そのため観光客数がそれまでの年間 110 万人台から 90 万人台に激減し、主要産業である観光産業が大きな打撃を受けた。この状況を打開するため柳川市と柳川市観光協会、柳川商工会議所が郷土の伝統的文化である「さげもん」習俗に着目し、平成 7 年から新しい観光の目玉として「柳川雛祭りさげもんめぐり」のイベントをスタートさせた。柳川の伝統手芸活動であるさげもん作りが今日まで維持されている重要な要因としてそれが埋め込まれた地元のひな祭り習俗の観光資源化が指摘できる。

注 7) ちなみに平成 24 年のパンフレットによると「柳川さげもんめぐり」の開催期間は 2 月 11 日から 4 月 3 日までとなっており、全体を構成する行事としては 1 月 28、29 日の「さげもん展示即売会」（柳川市民体育館サブアリーナ）、2 月 11 日の「おひな様始祭」（日吉神社）、2 月 11 日から 4 月 3 日のときめきひな灯り（柳川商店通り）、3 月 4 日の「帰り雛祭り」（日吉神社）、3 月 10 日、11 日、24 日、25 日の「初節句めぐり」（一般家庭）、3 月 18 日の「おひな様水上パレード」、3 月 25 日の「おひな様里親さがし」（日吉神社）そして最終日の 4 月 3 日の「流し雛祭り」（柳川橋下流）などがある。イベント期間に配置されたこれら小行事はそのつど「儀礼的賦活」を繰り返し、全体としての祝祭的時間の自足を実現する仕掛けとなっている。

注 8) 「即売会」は「つくる」期間の成果を集約的に披露する重要な催しであり、多様な制作集団あるいは個人によって作られたさげもんやそのパーツが広い会場内に所狭しと並べられ地域内外から訪れた客に対して販売される。その意味で「即売会」はさげもんの販売を主な目的としているが、作り手の女性たちにとっては絶好の作品発表の機会であり、技術をめぐる批評や学習の場ともなっている。ここで即売されたさげもんは県外への観光土産のほか地域家庭の初節句を迎える家庭の雛壇や商店街のショーウィンドウなどを華やかに飾ることになる。このように柳川のさげもん

「即売会」は「つくる」時期と「めぐる」時期の転換を境界付ける催しとして位置づいている。

注 9) ここでの手芸技術論のよりどころになっているのは言うまでもなくモースの「身体技法」概念である。「わたしはこの言葉（身体技法：筆者）をもって人間がそれぞれの社会で伝統的な様態でその身体を用いる仕方と解している」（モース 1976：121）

注 10) 着物の古着や端切れを再生利用するお細工物づくりにおいては、当時の女性の儉約精神や裁縫の技術、あるいは女性的美意識を身につけるための教材としての役割が期待されていた。これらの裁縫お細工はとくに戦後の衣服や生活様式の変化によってすたれていくが、日本玩具博物館の井上重義を中心にちりめん細工の復興・普及活動がすすめられてきた。1990 年代にはこれに「ちりめん細工」という平易な呼び名をあて、また出版や指導者育成、講座開講などの活動をととして「ちりめん細工」の復興と普及につとめた。現在では各地のカルチャーセンターや趣味講座などを中心に趣味の手芸としてふたたび女性たちの注目と関心を集めつつある。井上によれば柳川のさげもんの観光ブームも「ちりめん細工」への関心を広めるうえで一定の役割を果たしているという（井上 2008 配布資料 p 4）。今日のちりめん細工は女性の感性的な会日感覚に応える趣味の手芸としてカルチャーセンターの講座などを中心にさかんに製作されている。

参考文献

- ブルデュー, P. 1998 (1990), 『ディスタンクシオン I』(石井洋二郎訳) 藤原書店
ホブズボーム, E. 1994 「序論—伝統は創り出される」 E. ホブズボーム/T. レンジャー
『創られた伝統』前川啓治、梶原景昭他訳 紀伊國屋書店, pp. 9-28
後藤 明 2012 「技術人類学の画期としての 1993 年—フランス技術人類学のシェーン・オペラトワール論再考—」 『文化人類学』 Vol. 77-1 : 41-59
平井京之介 (編) 2012 『実践としてのコミュニティー—移動・国家・運動』 京都大学出版会
井上重義 2004 「ちりめん細工の復興活動」 『日本玩具博物館開館 30 周年記念誌』 日本玩具博物館, pp. 18-21
井上重義 2008 「ちりめん細工の復興について」 『ちりめん細工・春の寿ぎ展』 (北九州市立小倉城庭園 講演会配布資料 : 2008. 12. 13)
井上重義・尾崎織女 2009 『江戸・明治のちりめん細工』 雄鶏社
桑子敏雄 2001 『感性の哲学』 日本放送出版協会
ルロワ＝グーラン 1992 (1973), 『身ぶりと言葉』 (荒木亨訳) 新潮社.
Lemonnier, P. (eds), 2002, *Technological choices : transformation in material cultures since the Neolithic*, Routledge.
モース, M. 1976 『社会学と人類学 II』 (有地了訳) 弘文堂
Mauss, M., 2006, (edited and introduced by Nathan Schlanger.) *Techniques, technology and civilisation*, Durkheim Press : Berghahn Books.
森田敦郎 2012 『野生のエンジニアリング—対中小工業における人とモノの人類学—』 世界思想社
緒方文香 2006 『夢香る—柳川伝承まり・さげもん作品集—』 柳川伝承まり・さげもん研究会
大西秀之 2014 『技術と身体民族誌—フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸—』 昭和堂
坂元一光・アナトラ・グリジャナティ 2011 「ひな祭り行事の再構築と女性の手芸活動—柳川さげもん調査予報—」 『九州大学大学院教育学研究紀要』 第 13 号 : 59-73

- 坂元一光 2012「地域女性の学習資源としての手芸伝統－柳川のローカルな知をめぐって－」『九州大学大学院教育学研究紀要』、査読無し、第14号：59-73
- 坂元一光 2014『さげもんに託す地域の明日－伝統をつくり、めぐる、つなぐ－』九州大学教育人類学研究室
- 白石直樹 2006「柳川の雛祭り」と「さげもん」『雛の吊るし飾り』（山崎裕子（編））三弥井書店，pp. 53-61
- 杉森百周年誌編集委員会編 1995『杉森百年史』杉森女子学園
- シノット，A. 1997『ボディ・ソシアル』（高橋勇夫訳）筑摩書房
- 田辺繁治 2003『生き方の人類学－実践とは何か－』講談社現代新書
- 田辺繁治 2010『「生」の人類学』岩波書店
- 中村雄二郎 1997（1975）『感性の覚醒－近代情概念の再検討を通じて－』岩波書店
- 山崎明子 2005『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房
- 柳川市史編纂委員会編 2004『柳川の民俗概観』（柳川歴史資料集成第6巻）柳川市

Social practices of traditional handicraft technology and women's body

Ikko SAKAMOTO

The customs of first annual festival for girls in fukuoka prefecture yanagawa region are characterized by the *sagemon*, which is hanging ornaments comprising splendidly embroidered *mari* and small handmade stuffed figures made from silk crepe. These handicrafts are produced year round, as personally made gifts and as hobby handicrafts and souvenirs. This folk technology is embedded in women's body and transmitted mother to daughter. In recent years, *sagemon* have been exploited as a tourism resource, which, through the formation of a regional distribution system of supply and demand, has also stimulated production activities associated with various techniques and purposes, primarily among middle-aged females. Through their commodification as a tourism resource and voluntary activities of a variety of production groups, it has become clear that yanagawa *sagemon* folk craft is playing an active role in the stimulation of a regional community and re-creation of tradition, as well as improving the quality of life for middle-aged females.